

## 第5章 事後調査の概要

事後調査は、予測手法において不確実性が高い項目及び保全対策の効果に不確実性のある項目等について行うものとする。表 5-1に事後調査計画を示す。

表 5-1 事後調査計画

環境要素	実施理由又は非実施理由	保全対象等(対象の位置)	調査方法	調査時期等
低周波音	トンネル発破工事における予測については、予測条件の設定に不確実性が残るため、事後調査を実施する。 大型の建設作業機械を用いる場合は、ディーゼルエンジンの影響を無視できないため測定を実施しデータ収集を行う。	近傍民家(A案、D案)	「低周波音の測定方法に関するマニュアル」(平成12年10月、環境庁大気保全局)に定める測定方法による。	発破実施時 1回
植物	予測は、注目すべき個体、集団、種及び群落の生育地の消失・縮小、生育地の質的变化の影響について、事業実施による改変区域との重ね合わせや科学的知見を参考に行っていることから、予測の不確実性は小さいと考えられる。  しかし、保全対策として、生育個体の移植や表土及び在来種の活用等を実施するため、保全措置実施のための周辺環境の詳細な調査を実施するとともに、保全措置実施後の生育環境の経年変化を確認するためのモニタリング調査を実施する。	オオハナワラビ(大殿BC、柿DE) キヨスミヒメワラビ(G案) オキナグサ(B案) ウマノスズクサ(野DE) アイナウ(FG) タカクマヒキオコシ(F案) キクモ(野DE) アギナシ(ABC) ササユリ(ABC、A案) ヒメシャガ(FG) エビネ(FG) カヤラン(野DE、G案)	植物種の休眠期を除く活動期に、詳細な生育状況を調査する。	工事着工前の春～秋季、年1回程度
		クラガリシダ(D案) コフウロ(G案) ハダカホオズキ(F案) ソクズ(大殿BC) ササユリ(野DE) ヒメシャガ(野DE)	植物種の休眠期を除く活動期(発芽、開葉、伸長、開花、結実等)に、生育状況を調査する。	保全措置実施後3年間、年1回程度
			植物種の休眠期を除く活動期(発芽、開葉、伸長、開花、結実等)に、生育状況を調査する。	保全措置実施後3年間、年3回程度
動物	予測は、注目すべき個体、集団、種及び個体群の生息地の消失・縮小、生息地の質的变化の影響について、事業実施による改変区域との重ね合わせや科学的知見を参考に行っていることから、予測の不確実性は小さいと考えられる。  しかし、代替生息地によるミティゲーションを実施するツチガエルに対し不確実性が残ることから事後調査を実施する。	ツチガエル(ABC)	代替生息地として池等の止水域を創出するために環境調査を実施し、その位置や形状を検討する。  代替生息地における生息状況を確認する。	工事実施の2年前 春季、夏季  工事実施の1年前～供用後2年間 春季、夏季
生態系	予測は、注目種・群集の生息・生育基盤の消失・縮小、移動阻害、生息・生育地の質的变化の影響について、事業実施による改変区域との重ね合わせや科学的知見を参考に行っていることから、予測の不確実性は小さいと考えられる。  しかし、保全対策(ボックスカルバートやパイプカルバートの設置、高圧ナトリウムランプの採用等の効果や、クマタカ、オオタカ、ヒタサンショウウオ等、個別の種に対する対策、モモジロコウモリ、テングコウモリの代替ねぐらの利用等)について、効果に不確実性が残るために事後調査を実施する。	創出した移動経路を利用する種(ボックスカルバートやパイプカルバートの設置場所)  阿寺及び田立地域で繁殖するクマタカ番い 大島地域で繁殖するオオタカ番い  モモジロコウモリ(F案) テングコウモリ(F案)	自動撮影装置等によりボックスカルバートやパイプカルバートの利用状況を調査する。  CCDカメラにより巣を監視し、餌の種類、量を解析する。  行動圈及び繁殖を把握する調査を実施する。  現在のねぐらの周辺で代替ねぐらの候補地を選定する。	春夏秋冬の4季に効果の確認を実施。 供用後2年間と供用後5年程度  情報が収集できるまでの首次期間  繁殖期間毎月1回。工事実施前の2年間、工事中、供用後2年間、それ以後は必要に応じて継続  春季と夏季に実施 工事実施の2年前
			創出した代替ねぐらの利用状況を継続的に調査する。	保全対策後、約半年に1回 工事実施の直前～供用後概ね5年間